

私情によって勳臣と同じ賞を与えるわけにはいかぬし

十月二十九日の朝廷で、太宗はさりげなく問うた「天子の親戚をみな封爵するのは世の中のためによからうか」尙書右僕射の封彝がこたえる「上皇さまはご親戚を大切になさったので、史上例のないほどの王ができました。人民の負担は大きく、天下に公平を示すはえんではありませんまい」太宗がいう「そう。わしが天子になったのは国民を養うためだ。自分の親戚を養うために国民に苦勞をかけるわけにはいかぬし

十一月五日、神通の長男李道彦をはじめとして天子の親戚で郡王に封ぜられていたものが郡公に降爵された。功ある數十人を除いて。

翌年^{六三三}正月、貞観と改元された。

四年^{六三三}。李神通が死んだ。その月日、行年はいかからない。五十五、六歳だったろうと察せられる。太宗はこの日、朝廷を奏し、司空を贈り、靖と諡した。男子十一人、長子道彦は武徳五年、膠東王に封ぜられ、次男は早世したらしく、三男孝奮は高祖王、四男孝同は淄川王、五男孝慈は広平王、六男孝本は神通の伝には見えぬが、宗室世系表には河間郡公とする。七男孝友は神通の伝には河間王とし世系表には尙書左丞とする。八男孝節は清河王、九男孝義は膠西王、十男孝銳は世系表に盧州刺史、十一男孝遠は梁郡公。その王はみなの中に郡公にみとされたのである。

以上によつてみると、李神通は、失敗ばかりしているくせに功をほこりたがるオツチヨコチヨイで、太宗の批評は全くよくあつてゐる。だが、記事が太宗の批評を基準に排列記載されているとするならば、当るのは当然である。いま、神通の立場にたつて考えてみる。

神通の挙兵は自衛手段にすぎなかつたか。神通が隋の官憲に追われるようになったのは、李淵らが隋に対して反乱へ義旗・起義したからであつて、その反乱がなければ、神通が自衛する必要は全くなかつた。李淵は自分のむすめむこの蔡紹には連絡して準備の時間を与えたのに、神通が忍をく、て逃げ山中で飢えたのは、事前に知らされなかつたからであらう。しかもこの反乱のとき李淵の親戚で応じたものは、ほとんど神通ただ一人であつた。李淵や李世民がいかに勇猛であつても、神通らが長安を攪乱し、李淵らの渡河を掩護しなかつたら、その革命は成功しなかつたらう。また、いかに李淵の親戚だからとはいへ、神通に力がなければ短時日に数万の衆をあつめることはできなかつたらう。

宇文化及討伐の際の失敗はたしかに愚劣であつた。しかし当時、神通のひきいた重隊は、その大部分がいわゆる「群盜」の混成部隊であつて、かれらへの給与は現地調達にりだわられたはずである。長いつらい包圍戦に兵を耐えさせた指揮官が、かれらに与える給与に心をくだいたことはまた当然であらう。

竇建徳が神通をとらえながら、神通を客として礼遇したのは、神通にも礼遇せらるべき賢賢があつたことを物語るであらう。建徳が捕えられたのち建徳の部下の馮士羨が神通を慰撫山東使に

推したといふことは、長い捕虜生活における神通の隠忍と工作の結果といえないわけではない。当時の山東河北の情勢からいって、戦わずしてこれが善のものとなったのは大功で、それが神通の功ならば、先の失敗を補って余りがある。

劉黑闥の反乱は、恐らく、生かしておいてもよい竇建徳を殺し、生かす必要のない王世充を許したところに最も大きな原因があり、そのことの責任は李世民すなわち太宗こそが負わねばならぬものであった。黑闥の反乱がなければ、それと戦つての敗北は神通になかった。またそこでの敗北は神通の不運で、太宗もまたしばしば死にかけながら部下に救われたのは太宗の幸運であつた。徐円朗の死は神通の功であろうに、それはあまり評価されぬ。

孝同が父の神通に秦王をほめたのは、秦王世民のそれまでの行状からみて、明らかに世民自身の工作であろう。太子建成らが外戚と結んだので、それらに対抗しうる親戚の最有力者の神通と結ぼうとして、その子の孝同を使ったのだ。このとき世民は建成らをおしのけて帝位につくことをはつきり意志していた。

建成の夜宴で神通が救わなかったら、世民は殺されていたであろう。従つて帝位につくこともなかったであろう。

幸淵らけ起義に際して平陽公主には通知したが、神通には知らなかつた。共に捕われた同安公主をとりもどす工作はしたが、神通をとりもどしはしなかつた。

神通は終始、善にやむかず裏切らなかつた。しかし、かれは功臣でけなく、太宗が凌煙閣を築

て功臣の肖像を壁に描かせたときにも、神通はえらばれなかった。えらばれた功臣の伝を西書書により、神通の一生とを比較すると奇異の感を禁じえない。

しかしそれを奇異と感ずるのは英雄となりえない人間なのである。英雄となるためには、太宗のように、元を殺し、弟を殺し、その幼い子らをも殺しうる人でなければならぬ。目的を達するためには、裏切り者をも抱擁し、悪人をも捨てなければならぬ。實徳徳のような理想家、いまのことばでいへばヒューマニストが英雄たりえなかったのは当然である。

英雄に賭け、英雄に加担する人はそのことを承知しなければならぬ。神通は英雄に賭けた。幸いなことに殺されなかった。殺さねばならぬほどの英雄でも悪党でもない。太宗に呪くびられたのであろう。神通の人柄を『新書書』が「野俠」と評するとき、記者の目はほとんど太宗の視卓に在った。

一〇

神通の死後、浮沈はあったが、神通の子孫と、神通の弟神符の子孫とは、すなわち大野王考の人たちは、則天武后時代の李氏族滅政策にも耐えて、まずは順調に存続した大族であり、宰相から無名の人まで、そうして反乱して逆賊の名をこうむるまで生んだ。宗室世系表の大野王考の人で宰相と同世代と思われる人は三十名をこえる。その半数以上は官名をしるし、宰相も数名

いる。唐の皇室としては、神通兄弟の子孫には充分むくいた、と考ふるであろう。世の人もまたそう思っているであろう。過ぎ去ったことを人はいつまでも考文続けたりすることは好まぬ。まして、英雄を好むのが世間であり、英雄があざけた道化の心情を歴史を裏かえしてまでさぐるうとせめのは当然である。李神通の死は李賀の生誕に百六十年さきだつ。ほとんど二百年も昔の先祖の手柄話などは、感心した類をして聞いても、心の中では話し手を笑うものである。

李賀は唐書宗室世系表の大鄭王房にその名がみえない。ほかにも同じような人がいたはずで、それらを合せると五十人くらいにはなるう。賀はその微弱な五十分の一にすぎない。その五十分の一に上つての祖神通は、客観的には、というのは第三者の世間の目から見ればということだが殆ど何の意味もない。祖先の如何は、それを祖と考ふる本人の主観にとつてのみ意味がある。主観にとつてのみ意味があるということは、問題が歴史をはなれて文学の境域にはいったということだろうか。

李賀は、歴史の終つたところからその作業をはじめめる詩人だつた（拙稿「補怨」参照）。そのことをかれの身上に即して確かめるために、わたしもまた、これだけの手順をふまねばならなかつた。つまり歴史の立場からすれば、李賀を考ふるためには、わたしが書いてきたこの「李神通」という文章は無意味であろうが、李賀の詩を味わうためには、書いておかねばならなかつた。ところで、客観的にゼロにひとしいことを、主観もゼロにひとしいと覺つたとき、主客めでた、くゼロになるかという、そうならないのもまた世間であるらしい。

二百年前の神通の忠誠をその子孫の責がいうことが滑稽ならば、二百年前の英雄太宗の子孫の一人が天子の位についているのもおかしい。昔の忠臣をもち出すのが滑稽ならば、昔の姦臣をもち出してその子孫を責めるのもおかしい（ス臣ではないが、則天武后の族弟武平一の子孫ということ）。武徳衛が宰相令狐楚にそしられたことがある。親の功をいうことが滑稽なら、子が親の罪を負わねばならないのもおかしい。太宗は、兄建成・弟元吉を殺したときその子らをも殺した。それなら二人の兄弟であるおのれにも坐すべき罪があることにはならないか。

こういう理路は世間では通りにくいようである。それを通やうとするものを、こども、といひ、小器という。勝てば官軍であり、勝った英雄をたたえるのが、おとな、であり、おとなの感情を清濁あわせ呑むのが、大器、である。だが大器のおとなも、おのれが被害者となったとき、なつかつ、おとなの大器を持統しうるか。

孝翼が、おのれの悪い行為によってではなく、劣った才能によってでもなく、父の名を理由に進士科受験を断念しなければならなくなったとき、おそらくかれは父と子、あるいは祖先と子孫のかかわりについて根本的に考えることを強いられた。

礼法によって拒まれたものは礼法の根本を問わねばならぬ。諱の禁は礼法に出で、礼は國家の大法、文化の根柢とされるのだから。國家の大法、文化の根柢は、天に由來するといわれる。天に由來するものによって拒まれたものは、天を問わねばならぬ。それとも、おのれの不徳とひたすらに恐れかしこむか。

天子太宗の行爲が天意に出るのならば幼児殺害も天意か。礼か。勝てば官軍が天意ならば、天とは暴力権力の代名詞にすぎぬではないか。

だが、そういう論理は世には通らぬ。論理を通すのも力であり非理を通すのも力であり、力は組織に集中し、組織をけなれた個人からは蒸発する。客観的な価値とは組織が承認する価値である。組織がゼロとする価値も、組織をけなれた個人に痛みをもって迫ってくるときどうすればよいか。個人はその痛みを錯覚として、組織の価値を絶対の真実と観ずることによって、再び組織に抱かれるか、組織に抱かれることを断念して痛みを保持するか。だが、人け人として生れた時何らかの組織とかわることなしには生存できないものとして存在した。引き裂かれながら組織に鎖づけられて生きる人が、組織にとって無価値な主観をうめき出すとき、その痛みが、組織の価値をうつか、うたないか。

李賀が進士科受験を拒まれながら、他の名目で官吏にやとい入れられたとき、かれの理性は気づかなかつたとしても、かれの感性はこの論理を察知したはずである。かれの詩は神通を、孝遠を、晉肅をおくびにも出さぬ。しかも世の笑いの種にしかならぬ宗人、宗孫、皇孫などの語を使う。だがそれらがしばしばおのれを滑稽化したときに用いられていることは、組織が滑稽とするものを進んでおのれにまといつけることによつて、組織そのものの滑稽を指しているのではないが。かれの詩には予想もせぬほどびっしりかれの祖先の故事をうたいこんでいるようである。それこそかれの見出した問、天の手法であり、天を尊んで天、問とよんだという楚辞の手法を顛倒する。

拙稿「楞伽」でのべた李孝逸について補足する。

岑仲勉「通鑑隋唐紀比事質疑」一一三頁に「李孝逸流儋州卒」の一条がある。通鑑垂拱三年(六八六)五月己亥、殺梁郡公李孝逸……唐曆云：「四月十一日、誅益州長史李孝逸……」統紀「誅李孝逸并其黨崔元昉、裴安期。」今從實錄及舊傳。」をあげた上で、陳伯玉集の「爲李卿讓本官表」を引き、李卿は孝逸のおいの李珍で、表を上ったのは永昌元年(六八九)八月九月。その時、孝逸に関し調査にいった役人がまだ帰ってこないの云々という記事があるので、その調査の結果に明証がないと疑問がのこる、という。

孝逸は神通の十一子だった。神通の死は六三〇年、その年に一歳だったとしても、永昌元年には六十歳。たぶんさらに数歳を加えるであろうから、許されたとしてもあまり長く生きてはいなかったであろう。

そうして、流竈の地で妻妾をもったかもしれぬというさきのわたしの想像△雑記▽はほとんど成り立たぬことが、はっきりした。

鷗林忌 辛亥六月八日

「李長吉」周邊 (四)

一九四一年五月十六日

一人の英雄を生む爲には大きな犠牲がはらはれなくてはならぬ。

×
信じたことをやって行って、失敗だったとしてもそれでいいではないか。議論をして勝ってみ
たところで何にならう。高踏するものは高踏せしめよ

胸にわだかまる醜いものも、それが自らと分ちがたいものならば、見つめ、煉り上げるよりほ
かはないのだ。醜さのなかにも道はひらかれよう。

觸れ合はうとせめ者の間でいくらすぢ道たてて話してみても、どこかですれてしまふだけだ。

五月十八日

山鬼吹燈滅 厨人語夜闌 少陵、移居公安山館

樹蜜早蜂亂 江泥輕燕斜 入喬口 囊空恐羞澁 留得一錢

香 を震 簾影微微落 津流脈脈斜 遺意

五月二十六日

数人の詩人に同題の詩があるときにはこれを細かに比較検討することはその詩人たちの性格の
相違を知るためのよい材料であらう。

五月廿日

物の裡から物の意味を見出すこと。物に意味を付け加へるのではなく。物の意味は平均強く物の裡へはいつてゆくもののみひらかれる。自らを無にしなければ、物の意味はおそひかかって来ぬであらう。

六月一日

午後、博物館に武氏碑拓を見に行った。二千年前の人々のあらしみにみちた。そして、人々の胸にはまだ龍や人魚が生き生きと走りまわってゐる世界の、かたしいすがたが、こまかく描き出されてゐた。

六月五日

古典——源泉となりうる作品。そこからあらゆる新しい藝術が流出しうるもの。そこへぶつかって、新しい意味をひき出しうる作品。

六月十一日

俺をあれほどさいなんできた彼らは一体何だ。彼らもまた自分勝手な要求を出してゐるにすぎないではないか。彼らの道徳とは一体何だ。彼らの共同とは何だ。彼らの諧和とは何だ。彼らの道徳の中にゐないからといって、どうして俺が悪いのだ。都合のよい時にだけ持ち出す彼らの共同、彼らの諧和、仁義。迷える羊よ、俺は俺ではなかったか。俺よ、俺の道をまっしぐらに歩め。

六月十八日

李長吉の詩からは朗らかな笑ひは聞えて来ない。

x 夫、水は魚にくらはれて其跡を見せず、山は曇れども晴たる夕あり、年々病衰かくのごとくして何の似たるや、常住一身漸に浸し月夜を心の形とす、物に堪むとする時は氣上して頭に海をたたへ浪頻に狂ふ、そのあやふきに片よりて間事に忘れなすことに覺束なし。萬迷ひのはてしなくよそのわざすて皆おのが思ひとせめつかれて、其くるしさを竹の筒にせまうて息をふくに六なし、誠この歌なくて一日あらば生涯の思ひ出なるべし、かかる身の明日は猶たのみなし、今朝迄のいのちあるに甲斐なきこと淺ましや中々也。

x 服部土芳 菟虫庵集 より

李長吉にとつては、彼の現実は無常、それも遠からぬ未来に通つてゐる死を通して生きいきと感ぜられるのだった。現世への倒錯的愛執は青く燃える熾光の透明さで彼のいのちに滲み透った。

七月二日

支那の文學では、淡遠を貴しとし怪奇をいやしむ風がある。これは何故であるかを考ふる。淡遠を貴ぶ國の人が、怪談を喜ぶ風習を有することについての心理を考察せよ。

人間は己の理解しうるものだけに關心を向けるのではない。むしろ理解しえないものに多くの關心をよせるのだ。それが人々に怪談をつくらせた。袖をつくらせ、鬼をつくらせ、地獄を描かせた。

七月八日

李長吉は、意味が多くつめこまれた言葉を好んだ。

李長吉は、一字一字、一句一句に、彼の全生命を注いだ。一句ができ、次の一句ができる。彼はそれを突っ放した。一句の磁気が他の一句をひきつけるにまかしたのだった。

七月九日

山瀑無聲玉虹懸 北中寒 李長吉の詩の特徴をよく示す。

x

神遇為夢、形接為事、故畫想夜夢、神形所遇、故神凝者、想夢自消、信覺不語、信夢不達、物化之往來者也、古之真人、其覺自忘、其寤不夢、幾虛語哉 列子

x

既に天への信仰は失はれてゐる。神仙も彼には虚罔であった。無限はない。終りへ終へと近づくと相が心を苦しめた。天への回歸は考へられぬ。西方極樂國も知覺の外へ追ひやった。あるものは現世だけ。それも終りに近い現世である。ここに現世へのかぎりない愛執の意味がある。

少年心事當琴雲 誰念幽寒坐鳴呃 致通行 龍西長吉指頰客 酒闌感覺中區窄 源龍張大倫索詩

かれの詩は、濃縮された生命だ。

七月十四日

凡繪は物の形象にて候へば、先其形を可正候事に被存候……其師と致候古畫に就て、古人如何

なる意より如斯筆蹟は生ずるやと、其古人の胸中を想見し、其意に就て形を求め候はば遺事有ま
じく被存候……李日華曰、繪事必以微茫慘愴爲妙境非性靈鄙徹者未易證入 玉洲畫題 より

七月十五日

兎ることの外に、彼にできることは何ひとつなかつた。國の滅びゆくさまを、家の滅びゆくさまを、そして自らの滅びゆくさまを。彼は見た。そして心をこめて詩を作つた。

八月十二日

長吉の李夫人歌を考察せよ。蘭香神女廟・許公子鄭姬歌を参考せよ。

八月二十一日

誰能看石帆 衆船鏡中入 月澹漁篇

八月三十一日

山にかかつてから何故かう悲しくなつてくるのであらう
物の怪めいた雨が草村に音なく濃ぐ

(ほそぼそときこえるのはなに)

「長安の夜半の秋を

風前に老ゆる幾人」

(いや たれもみぬ をらぬ)

黄昏の徑はおぼおぼ消え

櫟の林はざぼぼけと空に鳴る

月午 樹々は影を衰った

山は 白い暁

たいまつは 新しい亡者を迎え

幽墳をめぐって 螢の おひただしや、

十月一日

出門不識路 羞問陌頭人 雑俗

十月十七日

ファーエトンは日神ヘーリオスを父とする半神である。彼は自分が神々の族であることを知らしめようとする驕慢の念やみがたく、一日父ヘーリオスの日の車を御して空を駆けらうとしたが、天馬の狂奔を制驭することが出来ず、太陽の通過すべき軌道を逸して、ツォイスの怒に觸れ、その電光に撃たれて身を亡した。

小牧健夫 浪漫詩人としてのヘルデルリン

十月二十四日

丁病院でレントゲンをとる。肺門が少しやられているようだから今のうちに嚴重に養生せよ。

十一月二十四日

論文、製本にやる。

徴兵検査通達書をうく。

十一月二十五日

このごろの僕といつたら、崇高なものといやしいもの、美しいものと汚いもの、そんな両極にあるものたちが、焼けつく様に燃えるかと思つと、忽ち凍結してしまつたりする。

長吉のやうに、生に執着して死の世界に去り切れず、幽明に漂ふ魂魄のやうな詩を作つた人について、物を書いたりすることは、こんな時には苦しいものだ。僕はどれくらゐ彼を讚美しさうになつたかしのれない。それを恐れたので随分氣をつけたが、結局はさうなつたかもしれぬ。僕は長い間、長吉のやうな秀れた詩人が何故その國の人にあまり好まれないのか不思議だつた。結論をつける頃になつてやつとわかつたのだけれども、それは尤もなことだつた。その國の人ばかりではない。恐らく、少數の烈しい心を持つ詩人以外に、彼の世界には、行ける人があるまい。彼の詩は絶望に向つて履かれた怒なのだ。彼ほど苦しみや怒しみをさぐりもとめた神経の持主はないだらう。彼の心は決して老子のやうに無爲のイデアに向はない。あの國の小説の多くが向ふ笑ひへも彼の詩は向はない。また杜甫のやうに經國の熱情といつたものにも向はない。彼の詩は生の矛盾に生れ、生の矛盾に進むばかりだ。和泉式部がさうだつた。運命はここでは切り拓かれるものとしては存在しない。ただ人を苦しませる爲にのみ運命が働き、人は享樂によつて反抗するだけだ。その享樂すら彼を安らかにせぬ。あれほど執拗な絶望だ。特に東洋の人間では。

これほどの矛盾と混亂（絶望とは生の混亂よりわき上る生への棄絶）とからこれほどの美を作り出した藝術的凝縮力といふところで、どうにか明るさに導いて結論とした。これは、長吉より

も、僕を長吉から救い出すための説教であったかもしれない。

彼の詩を楽しんで讀めるほど心の明るい人はいない。彼と共に絶望してしまふ様な人間は、彼から遁れ出なければならぬ。遁れ出ることのできる人はいない。遁れ出ることのできない人は、自ら毒を持つ蝮毒の人間で、死ぬまで毒を背負い毒を吐きつづけるより仕方がない。僕はその何れであろうか。

論文がやっとすんだ。ふりかえってみると、もう長らく便りをしなかった。庭の話など夢中にできた頃が思はれてならない。

このあひだ村上善岳追憶展に行った。ひとすぢに繪に生き、繪によって高められていった藝術家はどんなに幸福だったらうと思つた。逆年順にならんだ繪を見ていて、美術學校卒業制作の前に出たとき、子供らしさの多いこの繪から晩年の嚴しさに飛躍する作者の精神生活の変化を想像してみた。一緒に陳列してある語録を讀み、用筆なども見た。そこに伺はれる作者の生活と藝術との間に行とんど間隙がないようなので、驚いた。

藝術への専心、誠実を語りながら、僕など、どれほど卑俗なもので心を汚してゐるかかわからない。僕の歌にはきつとそれが表れるに違ひないと思ふとはづかしかつた。藝術はど人の心をよく表すものはないとつくづく思つた。今までの僕の考へ方には随分まちがつたところがあつたと省られた。藝術のためには如何なることも許されるといつた考へは正しくない。藝術は人間が生きる道なのであつて、藝術それ自身といつた抽象されるものはない。それだからこそ藝術に専心す

ることが生きることになる。筆をとって描くこと以外に何ひとつしなかつたとしても彼が正しく生きた人といはれるのは、藝術そのものが生きる道であるからに違ひない。軍人であれば戦ふこともまた生きる道だと思つた。そしてもし日本人がすべて軍人であるなら日本人のすべては戦に死するところに日本人の生きる道があるとも思つた。ただ僕には、今の世風の動きが、正しく人々が生きるために進んでゐるかどうかがわからない。正しく生きるためには、このやうに人々が殺し合ひ憎み合はねばならないかどうかがわからない。長吉があんなに絶望の底を喘ぎ歩かねばならなかつたのはやっぱり人の世のいつけりに胸をさしぬかれたからだらうとも思ふ。

人々を殺し、美しいものを打ちこはすために費される多くの生命が何故もつと直捷生きるために向けられないのだろうか、人はただ美によつて生産するといはれるが、過去の人々が生命をそいだ美をうちくだいてゆく今の戦が、果して生きるための産むための努力なのであらうか。それとも、すでに作られた美はとるに足りないもので、それらをうちこはして新しい美を生み、そこから新しい生を見出すといふのだろうか。

藝術のためには如何なることも許されると言つた考へは正しくない。藝術とは人間が正しく死する道であるからだ。戦ひのためには如何なることも許されると言つた考へは正しくない。戦ひは人間が正しく生きる道であるからだ。軍人が戦ひに死することは、人間として正しい生を生きるためでなければならぬ。藝術家が藝術に生きるのは、人間として正しく死するための戦ひなのであらう。いま世界が擧つて流れこんでゆく戦亂は、果して人々が正しく生きるための戦ひなのであらう。

か。いま藝術家の多くが叫ぶ生命の頌歌は、果して彼らが人間として正しく死するために歌はれたものであらうか。

△雑記・21 V 詩林 広 記

書棚を整理していたら、和刻本の『詩林広記』が出てきた。前集二、後集三、あわせて五冊の本だが、その第五冊が欠けているので、鏤刻の年次、刊者の名、ともにわからない。はじめに明の張翥の「重刊詩林広記序」、ついで編者の宋の蔡正孫の原序がある。張氏の序にいう。

龜山先生がいう「詩を作るには、詩經の風雅（國風や大雅・小雅）の精神を知らずに詩を作ることにはできない。詩では詠諷へ嫉曲に諷諫すること」が大切だ。そうすれば言う者も罪さるることなく、聞く者も自ら戒めることができる。それでこそ社会生活にとっての補いたりうるわけだ」と。わたしはかつて、この言葉を再三熟讀し、ひろく古人の詩を見てみた。筆に造化を補うもの、詞に鬼神を泣かせるものは、ある。温厚和平のうちに諷諫を寄せたものをさがしたが、たくさんは見る事ができなかった。また、そうした言葉はあっても多くの詩人文人の作中にちらほら出てくるのだから、博雅の君子であつても見つくしやすくはない。ところで、宋の蔡翥先生の『詩林広記』は晉唐以降わがくにの諸家の詩のすぐれたものをあつめ、長篇・短章各文体のものがみ々具備している。また大儒・故老のすぐれた詩話をと